

共苦のスピリチュアリティ

佐藤 壮 広

—— 沖縄の民間巫者の身体とシマの痛み ——

序

「ユタ」と呼ばれる沖縄の民間巫者は、死者、沖縄戦での戦死者、心身に困難を抱えている人々の痛み、そして琉球・沖縄が歴史的に受けてきた苦難をも、その身体に感受する。そして、その痛みを和らげ、除去するなどの対処行動をとる。その効果は、供養、治療、治癒、癒しなどという語で表現される。本報告では、あるユタの女性が、自身の心身の痛みの症状を、琉球・沖縄が経てきた歴史的苦難と重ね合わせ、琉球・沖縄に点在する聖地を「つなぎなおす」祈願行為によって、自らの症状の治癒を図った事例を紹介する。結論としてふたつのことを述べる。

一、個人史と地域史、個人の身体と地域の現状を重ね合わせる思考と感性の基盤には、コスモロジーとそこに生きる人間との濃密な関係があるという点。二、沖縄の民間巫者のそうした思考や感性は、「スピリチュアリティ」と呼ばれている現代人の新たな精神のありかたの一角と重なっており、同時に、他者や他地域が抱える問題や危機へと目配りできる能力を育むために重要なものだという点である。

一 ユタの祈願と痛みの声、身体の表出

報告者は、「ユタ」と呼ばれる民間巫者の生活世界をフィールドとして、調査・研究を続けている。一九九七年から九九年まで那覇市首里に居住して調査を行った際、出会ったユタの女性たちが体現する二つのことに注目した。そのひとつは、彼女たちの巫病体験、つまり「痛み」が、歌謡（琉歌・沖縄民謡）の形式を基盤にしながら、声として表出してくるという点である。御願所（ウガンジュ）とよばれる聖域のなかで正座し、自身の苦悩や葛藤を語るうちに、ユタの女性たちは八・八・六の三〇文字を定型とする琉歌（リュウカ）のリズムのせ、その思いを歌い出すことがある。それを、同行の仲間がじつと聴く。小さいながら、そこには「痛みの声を聴く」共同体が出来あがる。これは、個々の「痛みの声」を外在化させるのに、歌が重要なはたらきを示す一例である。

注目したことのふたつめは、琉球・沖縄が歴史的に抱えてきた苦難の歩みおよび現状に、彼女たちが身体をもって反応するという点である。シマの痛みが、自身の身体の痛みとシンク

口するのである。例えば、以下で紹介する上原実余子というユタの女性（宜野湾市、普天間基地に面した場所に居住。故人。）は、自身の腰痛の原因をシマの中心に居座る米軍基地と重ね合わせ、症状への対処行動をとった。彼女は、かつて各地域の中心施設だったグスク群を巡拝祈願し、戦争と基地によって分断されてしまった島の諸地域を、象徴的に「つなぎなおす」ことで、自身の身体の痛みを除こうとした。以下、実余子の歩みと実践を紹介しつつ、シマの痛みと自身の痛みの相同性を感じる民間巫者の世界をみていこう。

二 上原実余子（沖縄の「ユタ」）の歩み

上原実余子（一九二七～二〇〇一年）は、サイパンで生まれた。両親は、沖縄本島から渡った開拓移民である。サイパンの日本人中学校を卒業後、日本軍の航空省で働き始めたが、戦争が激化。米軍の爆撃を受け、施設は壊滅した。爆撃で、父も亡くした。同僚らが戦死するなか、実余子は生き延び、残った家族ともども米軍の捕虜となる。この頃から、異常体験が始まる。亡くなった友人らが現れ、実余子に語りかけたり、空腹の兵隊が土を食べる光景が見えるなど、死者の世界が現実次元へと入り込んでくるようになる。戦後、沖縄本島へ引き上げ、結婚し、雑貨の小売等をしてながら、一男四女を育てる。三〇歳を過ぎた頃から、いわゆる巫病（巫者になる過程の心身不調）に悩まされ、一時は衰弱しきって、死も覚悟したという。しかし、ユタに相談に行ったところ「あなたは沖縄のカミゴト（神事）をするように、カミサマから選ばれている」と言われ、嫌がる夫を説き

伏せ、カミゴトの道を歩み始めた。自身に降りてくる神霊の声を耳を傾け、その指示に従って沖縄じゅうの御嶽（ウタキ）村落のカミや神話の始祖が祀られているとされる聖地を巡拝した。一九七〇年には、カミサマから「世界平和」という文言を筆で書かされ、それを機に、「平和を祈ることが自分の使命だ」と悟ったという。その後、易学鑑定士の資格も取り、相談者に応じつつ、沖縄に点在する御嶽を巡拝し、同行者には聖地の歴史的由来や意味について解説も行った。自身が戦争体験をしているため、サイパンでの慰霊祭はもちろん、朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラン・イラク戦争、湾岸戦争の時には、平和祈願を行ってきたという。

一九九〇年代に入り、実余子はさらに祈りの活動の幅を広げる。一九九三年には「神々の地球サミット沖縄」という祈願祭で祈り、また「ニライカナイ祭り 世界平和会議」というイベントで、世界各地の先住民らと交流し、一九九七年には米国アリゾナ州の先住民・ホピ族の聖地を訪れ、長老らと合同平和祈願を行った。さらに、一九九八年には在沖縄米軍の嘉手納基地ゲート前で慰霊と平和を祈り、一九九九年九月には、活動のまとめとして「グスク・御嶽まつり」という祈願祭を主催し、沖縄本島の中南部に位置する中城城跡に約九〇名の参加者を集めた。

沖縄にあるグスク群の世界遺産への登録の動きが起こると、実余子は主なグスクを廻り、米軍基地に寸断された沖縄本島の各地域を「結ぶ」拝みを始めた。このグスク廻りの契機は、実余子自身の背中からの痛みである。病院で診察しても説明されない

背骨の痛みを抱え、実余子はその原因を探った。そして、自身の身体がいまだに基地の重圧に苦しむ沖縄社会の痛みを感じ、それが症状として出てきていると考えたのである。痛みへの対処行動として、琉球王国あるいはそれ以前のグスク時代の各城跡で祈り、それらを結ぶことで、歴史的にも地理的にも寸断されたシマを、統合された状態へと変えようとしたのである。図1は、実余子の身体とシマのグスクおよび痛みの重なりを模式的に示したものである。彼女は、自身の心身の痛みをシマ全体の痛みとして感受し、それを緩和する対処行動として平和祈願を行ったことになる。

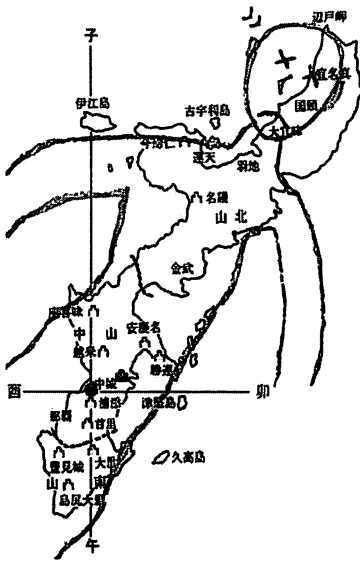


図1 シマの痛みと心身の痛み

シマの痛みと自身の痛みとが重なりあうという体験の意味を紐解くには、精神医学や心身医学の観点からの分析も必要だろう。「沖縄の痛み」や「沖縄と本土との温度差」などと、メデイ

アで散見される常套句は、実余子の身体にとつて、隠喩ではない。それは、文字通りの「シマの痛み」であり、自身の痛みなのである。

三 スピリチュアリティ、危機、神話的世界の発動

「スピリチュアリティ」という語は、社会学者の伊藤雅之によれば、「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすることを指す」という。この短い定義に従えば、不可知、不可視の存在とのつながりの感覚が、スピリチュアリティの核である。実余子にとり、シマは自分が暮らす空間そのものであり、不可知でも不可視でもない、生々しい現実の世界である。その目の前のシマが、基地被害や開発による環境汚染で傷んでいることを、実余子は背の痛みとして自分の身体に引き受けているのである。ここでは、こうした危機の場面で発動する感受性を「スピリチュアリティ」として意味づけ、実余子の民間巫者としての実践を考えてみたい。

医療の分野では、重篤な症状を抱える患者や末期の患者の魂や精神をケアする実践は、今日必要とされる医療、スピリチュアルケアとして、多くの現場で広がっている。ユタの実余子にとり、自身を支える秩序ある世界の危機は、自身の危機と地続きであり、シマをケアすることは自身をケアすることと同じなのである。窪寺俊之によれば、「スピリチュアリティとは人

生の危機に直面して生きる拠り所が揺れ動き、あるいは見失われてしまったとき、その危機状況で生きる力や、希望を見つけて出そうとして、自分の外の大きなものに新たに拠り所を求める機能のことであり、また危機の中で失われた生きる意味や目的を自己の内面に新たに見つけ出そうとする機能のことである」。

窪寺が語るこのスピリチュアルケアの文脈では、ある人間が危機に直面したとき、心身という枠を超えたより大きな存在（大自然や神々）と繋がりを直すことで、スピリチュアルなケアがもたらされるということになる。実余子の事例において、自身の生（せい）を意味づけるシマは、それ自体、痛みを抱えた時空である。傷ひとつなく純粹で聖性に満ちた土地は、地上戦の舞台となった沖縄本島には、数少ない。この点で、実余子が行った「つなぎなおし」は、相応に切実である。だからこそ、シマが出来上がってくる経過を語る神話や伝説の時間へと遡及する必要があったのである。

今帰仁城、名護城、座喜味城、具志川城、勝連城、中城城、浦添城、首里城、大里城、玉城城、知念城など、一九九九年までに実余子は、かつての豪族たちの居城であり聖地でもあったグスク群を巡りながら、地域の神々の由来を語るとともにシマの浄化を祈願した（図1のグスク跡はすべて、巡拝地点に含まれる）。そのまとめとして実余子は、一九九九年九月九日に、中城城跡で「グスク・御嶽まつり」という祈願祭を主催したのである。以下は、祈願祭の趣意書の一節である。

「グスク・御嶽は神々とともに起こり、祭政一致の斎場でもありました。しかし神仏を疎かにした人間の欲は、争い

を繰り返し、グスクは滅びていった。北は辺戸御嶽から、与那国・波照間、そして離島の島々を含む、沖縄のグスク・御嶽には、神々と人間社会の争いの歴史が深くしみ込んでいます。（中略）この度の、「グスク・御嶽まつり」は、グスク・御嶽に染み込んだ、ご先祖の血と汗と涙を祓い浄め、地にしみ込んださまざまな怨念を浄化し、ご先祖を供養し救いあげ、戦争や争いのカルマを清算しようとするものです」。

実余子の実践は、自身の身体の痛みへの対処行動に始まり、琉球・沖縄の神話や歴史物語の筋立てを、痛みの治癒の機制へと組み込んだものだった。実余子は、個別で私的な痛みを、共同体の痛み（シマの痛み）として読み替える。そうすることで、痛みを介して、シマと自分とがつながっていると了解したのだった。こうした思考あるいは感受性は、特異なもの、拒否されるものと考えるべきではない。濃密な身体感覚と想像力を介して、他者の痛みへと思ひ至ろうとする共苦のスピリチュアリティは、現在ますます必要となってきたからである。

注(1) 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』溪水社2003、

ii

(2) 窪寺俊之『スピリチュアルケア入門』三輪書店2000、p13